様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０８４３

研究課題名（和文）文化的価値の伝達：個人の選好および文化化による影響

研究課題名（英文）Transmission of cultural values: Influence of individual preferences and acculturation

研究代表者
石井　敬子（Ishii, Keiko）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：１０３４４５３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化的産物に着目し、文化において優勢な価値の維持・変容のプロセスについて検討した。連続再生法を用いて文化的産物の維持・変容を調べた実験（実験1）およびその文化化による効果（実験2）は限定的であったものの、文化的な価値と関連している選好に着目し、その動機づけへの影響を日本・ドイツで調べた実験3では、相互協調に価値を置く日本では他者の選好が動機づけを促進させたのに対し、ドイツではそのような傾向が見られなかった。さらにこの文化差には他者からの排除を回避しようという動機づけがかかわっており、このような排除回避の動機づけが文化的に優勢な価値の再生産に関与している可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research focused on cultural products and examined the processes of changing and maintaining culturally dominant values. Although two studies using a serial reproduction method and investigating the change and maintenance of cultural products (Study 1) and examining the effect of acculturation on it (Study 2) were conducted, the findings were limited. However, Study 3 focused on preference related to culturally dominant values and examined its influence on motivation in Japan and Germany. In Japan where interdependence is shared as a culturally dominant value, others' preferences fostered one's motivation, whereas in Germany where independence is shared as a culturally dominant value, such a tendency was not found. Moreover, the cultural difference was associated with one's motivation to avoid an exclusion by other group members. This suggests that this motivation to avoid an exclusion by other group members may relate to reproduction of culturally dominant values.

研究分野：社会・文化心理学

キーワード：文化　価値　選好　伝達

１．研究開始当初の背景

文化心理学の研究は、人の心の性質がそれぞれの文化圏で歴史的に培われてきた意味体系や信念、価値、社会規範に応じて異なっていることを明らかにしてきた。例えば、洋の東西において「自己とは何か」に関する共有された信念が異なり、北米を代表する西洋文化においては相互独立的自己観が、日本や韓国などの東アジア文化においては相互協調的自己観がそれぞれ優勢であると考えられている (Markus & Kitayama, 1991)。

一般的に、このような意味体系や信念は、当該の文化におけるさまざまな慣習の実践を通じ、認知、思考、感情、動機づけなどのさまざまな心の性質へと反映されると考えられている。加えて、近年、当該の文化において優勢な意味体系や価値を内包する物語や芸術作品、マスメディアによる報道、企業の広告といった媒体に注目し(注: Morling & Lamoreaux [2008] に基づき、以下ではそのような媒体の総称を文化的産物 [cultural products] と呼ぶ)、その内容を分析するとともに、そのような集合的表象と個人の心の性質との相互関係を探索する試みもなされつつある。例えば、Kim and Markus (1999) は、アメリカ人は韓国人よりもユニークなものを好むこと、そしてアメリカでは調和よりも独自性をテーマとした広告が顕著であるのに対し、韓国では独自性よりも調和をテーマとした広告が顕著であることを明らかにした。また申請者は、シンプルかつ文字情報に寄らない文化的産物として幾何図形への色の塗り方（塗り絵）に新たに着目し、日本と北米の成人および子ども（未就学児）を対象とした一連の実験を行い、1) 当該の文化において優勢な価値を反映し、日本の成人・子どもの塗り絵はより調和的であったのに対し、北米の成人・子どもの塗り絵はより独創的であり、2)日本人は日本の特に調和のとれた塗り絵を好みやすかったのに対し、北米人は北米の特に独創的な塗り絵を好みやすく、3) 子どもの塗り絵に対して、親はその文化で優勢な価値を反映したフィードバックをしやすいことを明らかにした。さらに申請者は、アジア系カナダ人を対象とした実験も行い、アジア文化に同化している参加者ほど日本人の塗り絵を好むのに対し、カナダ文化に同化している参加者ほど北米人の塗り絵を好むといった文化化 (acculturation) の効果も見出した (Ishii et al., in press, *PSPB* [2011-2013 年度若手研究(B)による補助])。申請者のこの研究成果は、文化的産物が当該の文化において優勢な価値（西洋における独自性、東洋における調和）によって特徴づけられ、しかもそういった価値と個人の選好は関連し合っており、人はそのような価値が反映された自文化の文化的産物を暗黙のうちに選好し奨励することでその価値の維持に寄与していることを示唆する。

２．研究の目的

過去 20 年間、さまざまな実証研究を通じ、心の性質がそれぞれの文化圏で歴史的に培われてきた意味体系や信念、価値、社会規範に対応しており、しかもそれが内省指標や行動指標のみならず、神経基盤に関する指標に注目した場合にも確認されることが徐々にわかってきている。このような脳科学への接近が進む一方、文化を特徴づける意味体系や信念、価値、社会規範がどのように維持、継承されているのかについての理論的考察はさほど進んでいない。そこで本研究では、以下の 2 点を調査する。

まず、連続再生法 (serial reproduction) を用い、人から人へと塗り絵が再生されていったときに、その個々人が生きる文化において優勢な価値がそこに付与され、強化されていくのか、また、出発点となる塗り絵の性質とそれへの選好は、繰り返し再生されて塗り絵が変容していくそのプロセスをどの程度調整するのかを調べる。日米それぞれにおいて、文化的な価値としてはニュートラルな塗り絵を出発点に人から人への再生を繰り返していき、そこで産出された塗り絵を比較した場合には、連続再生の結果、日本では調和性の高い塗り絵へと変容しやすいのに対し、アメリカでは独創性の高い塗り絵へと変容しやすいだろう。また、調和的ないしは独創的な塗り絵を出発点とした場合には、それが自文化で優勢な価値と一致している場合には変容しにくいのに対し、一致していない場合には変容しやすく、調和性の高い塗り絵は、アメリカにおいて独創性の高い塗り絵へと変容しやすいのに対し、独創的の高い塗り絵は、日本において調和性の高い塗り絵へと変容しやすいだろう。しかしながら、当該文化において優勢な価値観と個人の選好との関連を踏まえると、たとえ自文化で優勢な価値と一致した塗り絵であっても、それがその文化の成員によって好まれていない場合には、連続再生の結果、変容が生じやすいかもしれない。ある価値が当該文化において優勢であるということは、その価値が暗黙のうちにそこに生きる人々に好まれているからに他ならないが、本研究ではその点を切り分けた上で、文化的価値の維持・変容においてその価値に対する共有された好ましさがどのような影響を与えるのかを探索的に調べる。

次に、申請者の先行研究は塗り絵の好みのみに注目して文化化による影響を調べたが、塗り絵の産出、および連続再生法を用いた塗り絵の再生についても引き続きそれによる影響を検討する。

３．研究の方法

<u>研究 1：連続再生法を用いた文化的産物の変容</u>

予備調査をもとに文化的価値に関してニ

ュートラルな塗り絵を選出し、それを出発点として人から人へ再生していったとき、最終的にどのような特徴をもった塗り絵になるのかを日米において検討した。参加者は神戸大学の日本人学生 48 名、ウィスコンシン大学のアメリカ人学生 48 名であった。具体的には、日米それぞれにおいて参加者を 3 人 1 組にし、最初の参加者にはそのニュートラルな塗り絵を約 5 秒間提示した。そして妨害課題（2 分間の計算課題）の後、その塗り絵を再生するよう求めた。次の参加者にはその最初の参加者が再生した塗り絵を用いて、同様の手順で再生してもらった。最後まで終わった後、別のニュートラルな塗り絵を用いて、同じ再生課題を繰り返した。

研究 2：文化的産物の産出における文化化による影響

アジア系カナダ人を対象とした申請者の先行研究では、文化的習慣への参加等を通じて、カナダ文化への同化度が高い参加者ほどアメリカ人の塗り絵を好み、元々のアジア文化への同化度が高い参加者ほど日本人の塗り絵を好んだ。本研究では、このような文化化による影響が好みのみならず、文化的産物の産出にも影響を与えている可能性について検討した。先行研究同様、パッチワークの図柄をもとにした幾何的なパターンをいくつか用意し、1 人につき、2〜3 個の図柄に色鉛筆で色を塗ってもらった。その後、参加者は先行研究と同様に文化化の程度を測る尺度 (Vancouver Index of Acculturation; Ryder, Alden & Paulhus, 2000) に回答した。この塗り絵の産出は、トロント大学のアジア系カナダ人学生 46 名が行った。そしてこのようにした収集した塗り絵を神戸大学の日本人学生 81 名が、好み、独自性、調和性の観点から評定し、この評定値をもとにして、アジア系カナダ人の学生の塗り絵に含まれている独自性・調和性と文化化の程度との関連を検討した。

研究 3：価値を反映した選好と動機づけ

後述するように研究 1, 2 では思ったような成果が得られなかったため、文化的産物にこだわらず、より日常的な慣習に含まれる価値に着目し、その文化的価値と合う選好が動機づけを促す可能性について日本・ドイツで検討した。具体的には自身で選択ができる可能性があったにもかかわらず、同じグループの他の人間が選択をしてしまったときの反応に注目した。調和の価値を反映した日常的慣習とは、この場合、その選択内容をそのまま受け入れることであり、独自性の価値を反映した日常的慣習とは、この場合、その選択内容を受け入れず、むしろ自身が選択できた可能性を主張することである。日本人およびドイツ人がどちらの価値に対応した行動をとりやすいかをシナリオ実験 (日本人参加者 110 名、ドイツ人参加者 99 名) および行動実験 (日本人参加者 114 名、ドイツ人参加者 119 名)を通じて検討した。

４．研究成果

研究 1 に関しては、独自性および調和の価値による影響を探索する以前の問題として、どの程度正確に再生できるかどうかの個人差および塗り絵間の差が大きく、そのような理由で 3 人 1 組の鎖の中で一旦再生ができなくなると、その後のデータ収集がうまくいかなくなるという問題が生じた。このため期待していたような文化差を検知できるところまでいかず、実験パラダイムの再考が必要であることがうかがわれた。

実験 2 に関しては、まずアジア系カナダ人の塗り絵に対する日本人の好み評定はその調和性評定と正方向に強く相関していたのに対し (r = .82)、好みと独自性の間は無相関であった (r = .00)。これは先行研究 (Ishii et al., 2014) を追認するものであった。一方、そのアジア系カナダ人の文化化の程度と塗り絵から評定された独自性と調和性との間には相関が見られなかった (.11 < r < -.04)。ただし、カナダに住んでいる期間と塗り絵の独自性との間には正の相関が見られ、有意傾向であった (r = .24)。これは弱いながらも、カナダに長く住むことでその文化環境において優勢な価値観になじみ、それが塗り絵の産出に反映されたことを示唆する。

実験 3 に関しては、まずシナリオ実験における日独の差異を調べたところ、ドイツ人と比べて日本人は他者の選択に対してそのまま受け入れやすかったのに対し (t(207) = 5.89, p < .001)、日本人と比べドイツ人は自身に選択があることを主張しやすかった。次に行動実験では、参加者には 3, 4 人で課題を行うことでグループ感を与え、その後、各参加者に知能に関する課題を行ってもらった。その際、参加者を 1) そのグループの誰かが代表して各々が行う課題を決定したと教示される群 (選択なし群)、2) 自分が決定できると教示される群 (選択あり群)、3) 実験者が割り当てると教示される群に分けることで、その課題の成績における群間の差異を動機づけの指標として分析した。教示にかかわらず、課題は同一内容であった。その結果、文化と条件の交互作用が有意であった (F(2, 227) = 4.31, p = .01)。日本では、選択あり群と比較し、選択なし群のほうが有意に成績がよかったのに対し (t(227) = -2.07, p = .04)、ドイツでは選択なし群と比較し、選択あり群のほうが有意に成績がよかった (t(227) = 2.04, p = .04)。

さらにフォローアップとして、このシナリオ実験は一般人参加者を対象としたインターネット調査であったため、妥当性を高めるために、学生サンプルでの追試を行った。その際、プライミングの手法を用いることで、参加者の排除回避傾向を高めるような操作をした群を設けた。その結果、他者の選択の受け入れやすさ (p = .01)、および自身の選択についての主張のしやすさ (p < .001) のい

ずれについても文化差が追認できた。さらに、プライミングの主効果も有意であり、排除回避傾向が高められた群では、そうでない群と比較し、他者の選択をそのまま受け入れる傾向が強くなり (p = .03)、一方で自身の選択を主張する傾向は弱くなった (p = .01)。これは、間接的ながらも排除回避の動機づけが文化的に優勢な価値の再生産に関与している可能性が示唆するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

(1) Ishii, K., Eisen, C., & Hitokoto, H. (in press). The effects of social status and culture on delay discounting. *Japanese Psychological Research*. (査読付き)

(2) Ishii, K., Rule, N. O., & Toriyama, R. (in press). Context sensitivity in Canadian and Japanese children's judgments of emotion. *Current Psychology*. (査読付き)

(3) Eisen, C., Ishii, K., Miyamoto, Y., Ma, X., & Hitokoto, H. (2016). To accept one's fate or be its master: Culture, control, and workplace choice. *Frontiers in Psychology, 7,* 936. (査読付き)

(4) Eom, K., Kim, H. S., Sherman, D. K., & Ishii, K. (2016). Cultural variability in the link between environmental concern and support for environmental action. *Psychological Science, 27,* 1331-1339. (査読付き)

(5) Ishii, K., & Uchida, Y. (2016). Japanese youth marginalization decreases interdependent orientation. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *47*, 376-384. (査読付き)

(6) LeClair, J., Sasaki, J. Y., Ishii, K., Shinada, M., & Kim. H. S. (2016). Gene-culture interaction: Influence of culture and oxytocin receptor gene (OXTR) polymorphism on loneliness. *Culture and Brain, 4,* 21-37. (査読付き)

(7) Masuda, T., Ishii, K., & Kimura, J. (2016). When does the culturally dominant mode of attention appear or disappear? Comparing patterns of eye movement during the visual flicker task between European Canadians and Japanese. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 47,* 997-1014. (査読付き)

(8) Tybur, J. M., Inbar, Y., Aarøe, L., Barclay, P., Barlowe, F. K., De Barra, M., Becker, D. V., Borovoi, L., Choi, I., Choik, J. A., Consedine, N. S., Conway, A., Conway, J. R., Conway, P., Cubela Adoric, V., Demirci, E., Fernandez, A. M., Ferreira, D. C. S., Ishii, K., Jakšić, I., Ji, T., van Leeuwen, F., Lewis, D. M. G., Li, N. P., McIntyre, J. C., Mukherjeez, S., Park, J. H., Pawlowski, B., Petersen, M. B., Pizarro, D., Prodromitis, G., Prokop, P., Rantala, M. J., Reynolds, L. M., Sandin, B., Sevi, B., de Smet, D., Srinivasan, N., Tewari, S., Wilson, C., Yong, J. C., & Žeželj, I. (2016). Parasite stress and pathogen avoidance relate to distinct dimensions of political ideology across 30 nations. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, 113,* 12408-12413. (査読付き)

(9) Oishi, S., Kimura, R., Hayashi, H., Tatsuki, S., Tamura, K., Ishii, K., & Tucker, J. (2015). Psychological adaptation to the Great Hanshin-Awazi Earthquake of 1995: 16 years later victims still report lower levels of subjective well-being. *Journal of Research in Personality, 55*, 84-90. (査読付き)

(10) Ishii, K., Miyamoto, Y., Rule, N. O., & Toriyama, R. (2014). Physical objects as vehicles of cultural transmission: Maintaining harmony and uniqueness through colored geometric patterns. *Personality and Social Psychology Bulletin, 40,* 175-188. (査読付き)

(11) Nand, K., Masuda, T., Senzaki, S., & Ishii, K. (2014). Examining cultural drifts in artworks through development and history: Cultural comparisons between Japanese and Western landscape paintings and drawings. *Frontiers in Psychology, 5,* 1041. (査読付き)

(12) Senzaki, S., Masuda, T., & Ishii, K. (2014). When is perception top-down and when is it not? Culture, narrative, and attention. *Cognitive Science, 38,* 1493-1506. (査読付き)

〔学会発表〕（計 13 件）

(1) Eisen, C., & Ishii, K. (2017). Implicit preferemces for self-chosen possessions, choice options, and independence. Poster presented at the 18th Annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, San Antonio (サンアントニオコンベンションセンターー). (2017 年 1 月 21 日発表).

(2) Eisen, C., Ishii, K., & Ohno, Y. (2017). *Culture-dependent consequences of vicarious choice*. Poster presented at the Cultural Psychology Pre-conference of the 18th Annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, San Antonio (サンアントニオコンベンションセンターー). (2017 年 1 月 19 日発表).

(3) Eisen, C., & Ishii, K. (2016). *When the absence of choice equals freedom*. Paper presented at "the Emerging Psychologists' Symposium: Law of sociocultural mind in human beings" at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama (パシフィコ横浜) (2016 年 7 月 28 日発表).

(4) Eisen, C., & Ishii, K. (2016). *Culture, social rejection, and choice deprivation*. **日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学)** (2016 **年** 9 **月** 17 **日発表**).

(5) Eisen, C., Ishii, K., & Hitokoro, H. (2016). *Social class and reactions to deprived control: Is a choice on behalf of a group a restriction of personal freedoms?* Poster presented at the 23rd International Congress of Cross-Cultural Psychology, Nagoya (**ウィンクあいち**) (2016 **年** 8 **月** 2 **日**).

(6) Imada, T., Rodriguez-Mosquera, P., & Ishii, K. (2016). *Friend's positive evaluation benefits Westerners' friendship but harms Japanese friendship*. Paper presented at the 23rd International Congress of Cross-Cultural Psychology, Nagoya (**ウィンクあいち**) (2016 **年** 8 **月** 2 **日**).

(7) Ishii, K. (2016). *Cultural differences in delay discounting of gain and loss*. Paper presented at the 23rd International Congress of Cross-Cultural Psychology, Nagoya (**ウィンクあいち**) (2016 **年** 8 **月** 3 **日**).

(8) 石井敬子 (2016). **他者との一致を避けるとき：独自性欲求と他者の存在の役割**. **日本グループダイナミックス学会第 63 回大会 (九州大学)** (2016 **年** 10 **月** 10 **日**).

(9) Ishii, K., & Uchida, Y. (2016). *Japanese youth marginalization decreases interdependent orientation*. Paper presented at the Thematic Session "Recent cross-cultural and within-cultural findings on social orientation" at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama (**パシフィコ横浜**) (2016 **年** 7 **月** 28 **日発表**).

(10) Li, L. M. W., Masuda, T., Hamamura, T. & Ishii, K. (2016). *The influence of cultural thinking styles on resource allocation between European Canadians and East Asians*. Paper presented at the 23rd International Congress of Cross-Cultural Psychology, Nagoya (**ウィンクあいち**) (2016 **年** 8 **月** 3 **日**).

(11) Russell, M. J., Masuda, T., Ishii, K., & Hioki, K. (2016). *Culture and the perception of social context: How cultural background and social orientation affects in-group and out-group judgments*. Paper presented at the Thematic Session "Lights and shadows of in- and out-group bias: From development and evolutionary views" at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama (**パシフィコ横浜**) (2016 **年** 7 **月** 29 **日発表**).

(12) 石井敬子 (2015). ***文化的産物を通じた価値の維持と個人の選好：塗り絵を用いた比較文化研究***. **日本赤ちゃん学会第 15 回学術集会・ラウンドテーブル "おえかき" から探る心の起源 (かがわ国際会議場)** (2015 **年** 6 **月** 27 **日発表**).

(13) **越智美早・今田俊恵・石井敬子** (2015). **自己評価と友人からの評価の一致度から受ける印象：日英比較研究**. **日本社会心理学会第 56 回大会 (東京女子大学)** (2015 **年** 10 **月** 31 **日発表**).

〔図書〕（計 2 件）

Ishii, K., & Eisen, C. (2016). Measuring and Understanding Emotions in East Asia. In H. Meiselman (Ed.), *Emotion Measurement* (Pp. 629-644). Woodhead Publishing.

石井敬子・菅さやか (2016). **コミュニケーション**. **北村英哉・内田由紀子（編）*社会心理学概論*** (Pp. 171-187). **ナカニシヤ出版**.

〔その他〕

ホームページ等

http://www2.kobe-u.ac.jp/~ishiik/index-j.html
https://sites.google.com/site/kobecpl/home

６．研究組織

(1)**研究代表者**

石井　敬子（ISHII KEIKO）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：10344532